農聖・農民の父

山崎延吉※

山崎延吉は、1873（明治6）年、旧加賀藩士山崎有将の次男として金沢（現石川県金沢市）で生まれた。長男が死亡したことにより長子となる。

1894（明治27）年9月、上京して東京帝国大学農科大学に入学、農芸化学を専攻した。卒業後は、農科大学長の勧めもあり、福島県立蚕業学校（現在の県立福島明成高校）に就職、大阪府立農学校（現在の大阪府立大学農学部）を経て、1901（明治34）年9月に愛知県立農林学校の初代校長に就任した。退職後も生活の本拠を安城に置いて全国的な農民教育に精励し、第1回普通選挙で衆議院議員に当選するなど幾多の公職にも就任した。

学生時代からの農業志向は変わらず、大阪在勤の頃からすでに「我農生」という雅号で農業評論を雑誌に掲載していた。この雅号は、「我は農に生まれ、我は農に生き、我は農を生かさん」という信念から出たものであり、文字通りその信念を貫いた生涯を送った。1954（昭和29）年7月、安城の自宅で82歳で永眠され、葬儀は農民葬として愛知県立安城農林高等学校で厳粛に執り行われた。

〈 延吉の農業教育と農村振興 〉

山崎延吉が初代校長となった県立農林学校は、愛知県初の農林学校であった。延吉は農業教育の理想を実現すべく学校の建設にあたった。

校訓には礼節・勤労・利・共同を掲げて、農に生きるものに指針を与えた。教科以外にも「興風暦」と名付けた学校行事を設け、生徒の自主的活動を盛んに行った。また延吉は、学校を開放し、農民を対象とした各種の講習会を開いた。

1920（大正9）年10月に農林学校を退職後は、全国の農村を巡って「農業経営の改革」を説いた。そこでは必ず「日本デンマーク」（多角形）農業が紹介された。そのため1934（昭和9）年頃には「愛知県碧海郡の安城は、日本デンマークとして余りにも有名である。ここは一つの名所旧跡のようになっていて日本人であれ外国人であれ、偉いと偉くないとを問わず、一度は必ず行って見るところになっている。」といわれるようになっていた。安城市一帯が「日本デンマーク」と呼ばれるほどの農業先進地になったのは、こうした延吉の功績が大きく、農業発展に貢献した優れた指導者として「農聖」「農民の父」とも呼ばれた。

※名前の読み方には、ほかにも「のぶよし」、「えんきち」など諸説ありますが、当時の延吉の名刺に振られたローマ字のルビから「のぶきち」であったと推察されています。

山崎延吉像

安城農林高等学校内（安城市池浦町）